願い

継ぐという難しさ

**誰かに何かを伝えることは難しいことだ。
しかし、伝えなければそこで途絶えてしまう。
ふだい荒磯太鼓の後継者を育てる２人に話しを聞いた。**

和太鼓の伝承を通して人として成長してほしい

ふだい荒磯太鼓会長
嘉藤　明男さん
（53歳・上区）

伝統は時がたってから、残っていれば伝統になる。それは結果であって大切なのは継いでいく過程。上手とか下手とかではない。まずは、稽古をすると決めたときに稽古場に足を運べるかどうかだと思う。そこで責任感も生まれるし、仲間意識も生まれる。

いいときばかりではない。必ず壁にぶつかる。そんなとき仲間で励まし合い、先輩がアドバイスをする。そういう関係をつくっていきたい。

もう一つは、和太鼓を通じて何を学ぶかだと思う。それは人の話を聞く耳を持つことであり、目配り、気配り、思いやりの心を持つこと。人生でもこれは必要。稽古を通して仲間の大切さ、人として大切なことを学んでほしい。

金曜日の稽古後は飲み会をしている。飲んだときに本音がでるもの。その中で意見が食い違い、議論はしてもいい。だが個人攻撃はだめ。

今、いろんな場所で発表しているが、結果を自分に求めてはいけない。「自分はここまでやった」ではない。評価は回りがするもの。それを聞くだけでいい。ずっと続けて、さらに輪を広げて欲しい。

自分たちが楽しむこと 永遠の未完成であること

ふだい荒磯太鼓事務局長
三船　雄三さん
（52歳・緑区）

このメンバーには稽古を始めて2カ月で無謀にも村のチャリティー演芸会で初舞台を踏ませました。結局彼らには「こんなはずじゃなかった」という疑問・不満が残り、私には「こんなものだろう」という予想どおりの結果でした。

初めて取り組んだ曲が何とか形になりはじめた昨年の11月の中ごろ、彼らには舞台に立ってみたいという気持ちが芽ばえ始めていました。その芽ばえ始めた「勘違い」をどうにかしなければと考え「度胸試し」と偽り、舞台に立たせました。彼らは自らの「勘違い」を肌で感じたはずです。

何でもそうですが、まず自分たちが楽しむことが一番です。自分たちが楽しめないことを皆さんにお見せできませんからね。将来的にはできれば和太鼓を通し誰かを励まし、勇気付けることのできるチームに育てたいですね。

最近やっと和太鼓の魅力に気付き始めたようです。今、和太鼓を打つことが楽しくて仕方がない時期でしょう。これからも必死に稽古を重ね、それでいて永遠の未完成でいてほしいですね。すべてがこれからですよ。

舞太鼓「あすか組」主宰
飛鳥大五郎さん

技術を支える心の向上を!!

インパクトのあるめまぐるしかった１年が終わろうとしている。この時季になるとなぜだか分からないが、決まって普代を思い出す。投宿した宿（海の家まついそ）の枕元で聞いた荒波の音、通りの軒下につるしてあったサケの干物、それに降りかかる雪等々、ふだい荒磯太鼓が12月にお披露目したからだろうか？　あれから14年、皆よく頑張っているものだ。第１期生が活躍している中、今回新しいメンバーが８人も陣列に加わったとのこと。ほほ笑ましくも、頼もしくも、力強い限りである。

顔を合わせて、直接激励させて頂きたいところだが、とり急ぎ書面にて。

恐らく遊んでいる人はいないであろうと思われる。その忙しい中、時間を割いてのトライである。技術の向上も大事だが、その技術を支えきれる心の成長に期待したい。太鼓道場での闘いと成長が即、皆さんの社会生活に反映されることを目指して頑張って頂きたい！

もし、心身共に疲れたら、別にめずらしくもないだろうが、改めて、あの荒磯の波動に耳を傾けてみてはどうだろうか――？

たゆまず、ゆるまず、押し寄せてくるあの無限とも思えるほどの、力強さ、生命力、躍動するエネルギーに身をまかせ、チャージできたら、イザ明日へ！

中村　秀男さん
（77歳・上区）

仲間を増やし続けでけでー

海産まつりで若い人がやった太鼓は威勢があって良かったよ。おれも若がったらやりたがったねー。練習は大変だど思うども「荒磯太鼓を見さいぐびゃー」って言われんように頑張ってもらいたいねー。そして、もっと仲間を集めで、神楽だの盆踊りの太鼓のように100年でも200年でも続いで、次さつないで村に残してもらいたいねー。

坂下ひろ子さん
（73歳・緑区）

若い人たちは頑張ってよ!!

チャリティー演芸会や海産まつりで荒磯太鼓の発表を見ましたったー。太鼓の音を聴いていると、気持ちがいいし、元気がわいできます。何だか年を取っていてもウキウキしてきますー。若い人たちが、一生懸命に頑張っているのはうれしいですね。これからもずっと続けで、普代といったら「荒磯太鼓」って言われるように頑張ってくださいー。

特集 取材を終えて

新メンバー８人のステージを初めて目にしたのは、昨年12月のチャリティー演芸会のときだった。若者が真剣に和太鼓を打ち鳴らす姿に感動したのを覚えている。

初めて稽古場を訪れたのは今年の秋。すさまじい稽古に圧倒され「大変だね」と問いかけると、返ってきた言葉は「楽しいですよ」。「つらいです」という返事を期待していた私にとって予想外だった。

取材を続けるうちに分かったことがあった。それは彼らが稽古を通して、常に自分の可能性にチャレンジしていること、今まで感じたことのない喜びや感動を自分の中に宿し始めていることだった。

たくさんの若者が彼らのように何かに打ち込み、夢や希望を持ち続けられたら、きっと充実した人生を送れるのではないか――。そんなふうに感じ、また、若者に限らずそんな人たちがあふれる村であって欲しいと思った。

彼らは今日も元気に稽古場に向かう。ふだい荒磯太鼓を未来へ響かせるために――。輝く人生を自分たちで切り開くために――。